

# 茶の湯文化学会会報 No.6

第6号 / 1995年7月1日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL.075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 生産開発科学研究所内 FAX.075-702-9314

## クレイワークと茶陶

中村二柄

去る二月二十八日から四月二日まで、京都国立近代美術館で「ピーター・ヴォーコス展」が開かれた。ヴォーコスは一九二四年にモンタナ州ボーズマンでギリシャ移民を両親として生まれ、一九五〇年代、三〇歳の前後、ニューヨークの抽象表現主義の絵画（アクション・ペインティング）に刺激され、いろいろクレイワークと呼ばれる作域を開拓し、現代陶芸の先駆者のひとりとして活動、日本の陶芸界とも交流をもつ作家である。

一九五〇年代といえば、わが国の陶芸界でも、早く一九四八年に京都でおこった走泥社の運動がある。この日本の前衛運動は、当時「国際的同時性」という言



ピアーズ・ピース 「ピーター・ヴォーコス展」カタログより  
1962年：ピーター・ヴォーコス 58.4cm×29.2cm×30.5cm

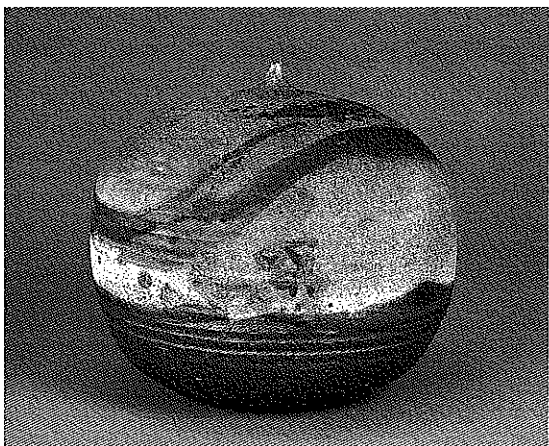
葉が流行したように、欧米の前衛と相互に触発し触発されながら、さまざまな意味で運命的に深く響き合っている。ところが、美術史の眼をもって見ると、両者の間には、一面の本質的な親近性ととも、それが著

しければ著しいほどかえって、根本的に相異なるものを見逃さない。その事態は、時を同じくして現われた、欧米のカリグラフィックな抽象絵画と、わが国の書芸術の革新運動——なかでも一九五二年にこれも京都で結成された墨人会の活動——との間にも、一層含蓄深く見い出される。欧米のクレイワークは因習的な用の美を否定して、もはや工芸的な陶磁器ではなく土それ自体の魅力へ、抽象絵画もタッシュヤ

シーニュそれ自体の魔術的な表現力へ向かい、わが国の現代書も文字ではなく書くことそれ自体の生命の躍動を追う。いずれも等しく純粹造形への熱情の奔騰であるが、東西を見比べると、「造形」というコンセプトそのものが根本的に相異なるのである。

たまたま昨日開会式が行なわれ、この六月六日から七月九日まで、同じく京都国立近代美術館で開催される「作陶五〇年——タカエズ・トシコ展」が、富山館長の式辞にも何われたとおり、さきのヴォーコスとは「対照的」に、またひとつの光を与えてくれる。彼女は沖縄出身の両親の間に、一九二二年ハワイで生まれ、それゆえほぼ同年輩。アメリカでは有名な陶芸家であるが、わが国ではまだまともって紹介されたことがないという。

ここには、あの「アクション」に見られたような激烈なフォルムは何もない。際立った凸凹も激しい屈曲もなく、すべて丸みを帯びた穏やかな形である。団栗の実か、瓜の实のような、張りのある、しかも優しく美しい形である。そのうえ茶色、黒、緑などの釉薬とその筆触が、風のような、波のような筆触が、静かに内面へ引入れる魅力をもっている。ここには言葉では説きがたい、本当の意味での



閉じられたフォルム 「タカエズ・トシコ展」カタログより  
トシコ・タカエズ：1970年 23.5cm×26.0cm

自然がある。用と美との対立ではなく、その底にはたらく「いのち」の美がある。

彼女は五〇年代に、やはり三〇歳前後のころ、来日して浜田庄司、金重陶陽らに会い、とくに禅や茶道から深い影響をうけたといわれる。たしかにそうであろう。ここにはわが国の伝統的な陶芸、なかでも茶陶に通じるものがあり、しかもその精神的伝統が今日のグローバルな世代に新たに目覚めているようである。

この展覧会は追って名古屋にも巡回するそうであるから、ぜひ一瞥をおすすめしたい。

茶を点て、賓主互換で小姐も茶筌を振るった。更に別のお茶を追加して飲み、主客とともにいささか茶に酩酊したごとくで、館を出たのは三時間も経ってからであった。

翌日、上海から昆明へ、そして飛行機を乗り継ぎ目指す思茅に着いたのは、もう夕方近くであった。空港では、華麗なパレードの熱烈歓迎を受けた。昨秋、法門寺のシンポジウムで親しくなった黄桂樞先生（思茅地区文物管理所所長）の姿もあった。「とうとう来てくれましたね」と言われ、握手をした時、国を越えた熱い友情が通い合うのが感じられた。

十六日は、第二回普洱茶祭開幕式に出席して華やかな文芸表演に目を奪われ、次いで竹林歌舞厅の歌舞表演、夜には民族歌舞晚餐会を楽しんだ。翌日、いよいよ目指す景邁古茶樹林の見学へと出発した。二十年前に拡張工事をしたという昔の茶馬道をバスに揺られること八時間。ひどい凸凹道で、バスの揺き上げる赤い土が車窓のガラスをまぶす。われわれ一行の安全を確保するため、思茅政府はこの道を二日間閉鎖して点検し、対向車両の通行を禁止してあるのだという。おかげで何の事故にも遭わず、無事に景邁村に到着。傣族

村民の踊りと奏楽の長い行列の大歓迎を受けた後、五千畝の大茶林に入った。樹齢八百年、高さ三〜六メートルの大茶樹が果てもなく広がっている。ちょうど新芽の季節で、樹に登って採茶中の少年の姿も見える。茶樹のところどころに蟹の足のような形に細かく枝分かれしたところがある。茶扁枝といい、樹齢五百年以上の茶樹に見られるという。蘭などの寄生植物もたくさんなり、それが茶樹の枝の分かれ目などで、いかにも居心地よげであるのが面白かった。案内して下さった何仕華先生（思茅茶葉学会理事長）が、もう二時間歩けば、山の向こうに巨大な茶樹があるから見に行きませんかと言ってくれたが、これ以上のカルチャーショックを受けたら胸が破裂してしまうのを恐れ、止めることにした。

再び華やかな舞踏と音楽のパレードに迎えられる。茶樹林の中の空地に案内された。私たちが歓迎するための、傣族式の百家飯の宴が始まるのである。食器代わりの葉っぱの包みから糯米飯とおかずを出して口にし、湯呑み代わりに竹筒を使った。古茶樹の葉を鉄板で炒ってから煮込んだ「烤茶」は格別に美味で、何杯もお代りをした。突然、携帯スピーカーを渡された。「私たちは海を越えて来

## 中国春茶紀行

倉澤行洋  
東 君

四月十四日から二週間、上海、思茅（雲南）、杭州、湖州、南京を旅した。茶文化にゆかりの地を訪ね、各地の茶文化のリーダーたちと交流するのが目的で、一行は、野村美術館の谷見さんと河原書店の渡辺和雄さんにわれわれ二人を合わせて、四名であった。

まず上海では、夜の南京街の見物をそこそこに済ませて、近ごろ噂に高い「博士茶芸館」に入った。中は物静かで調度品もなかなか洗練されていた。日本の立札の机を思わせる茶卓を囲んで、台湾式の功夫茶を楽しんだ。公道杯、問香杯などの珍しい道具もさることながら、茶芸小姐の知識の豊かさに一驚を喫した。会話を楽しみつつ三服いただいた時、小姐が突然、「日本の方からいただいた茶のセットがあります」と言って、日本製抹茶・抹茶茶碗・茶筌を持ち出してきた。われわれは、美しい小姐への返礼のために、また茶文化の国際交流のために、これを用いて茶を点じることにした。万事につけて用意周到な渡辺さんから帛紗を借りて、倉澤が盆略点前で

ました……」と、声を張り上げて挨拶をしたが、東訳の北京語を理解できた村民は少なかつたようだ。でも盛大な拍手を受けた。暮れなずむ中、今度は村のお寺の前の広場に案内された。ここで拉祜族自治県民族歌舞団の公演、村民手づくりの花火の打ち上げ……と、歓迎の催しは遅くまで続き、宿所に指定された刀さんの家に着いたのは、もう真夜中近くであった。

景邁の朝は早い。ムームーと餌を求める水



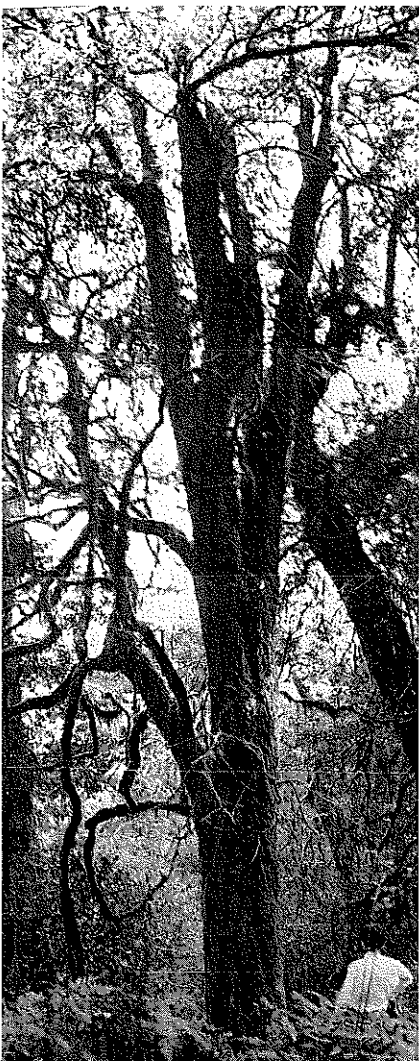
朝の景邁村

牛、卵を産んでコケッコと鳴く雌鶏、茶摘み娘の足輪のチリンチリンという澄んだ音、俵語の挨拶の声、立ち上る炊煙、すべてがいきいきとしていて魅力的であった。烤茶と朝ご飯を振舞われ、刀おばさんから渡されたおみやげの粽を肩に、古茶樹の村を後にした。

大自然の中で、大自然の循環と一つに人々が生きている——そういう景遇の生活は、貧しいかも知れないが、私ども都会生活者に、忘れかけていた何かを切なく懐かしく想い起こさせ、その生活を羨やましいとすら思った。考えてみれば茶文化は、人と自然が本来一つであるという東洋的自然観・人間観の上に展開してきた文化であった。その点からすれば、茶と共に生き、そして大自然と一つに生きる

景遇の人々の生活にこそ茶文化の原点があると感じずにはいられなかった。しかし、いつかこの茶馬道は舗装され、茶樹林も量産の茶畑に変貌することだろう。現代化の波は、彼等には甘露であろうか、洪水であろうか。景遇よ、茶の故郷よ、さようなら！

思茅に帰った翌日の午前、「第二回普洱茶祭文化シンポジウム」が開かれた。思茅が近年にわかに注目されるようになったのは、大茶樹の野性型・栽培型・過渡型のいずれもがここで発見され、茶の原産地の中心地帯とくに認定されたからである。当然、シンポジウムの話題は、この地区の大茶樹のことであった。このシンポジウムおよびこの後の黄桂樞・何仕華両先生との交流を通じて、思いが



千家寨大茶樹（何仕華氏撮影）

いるが、都会の「文化人」たちは、自分らの都合で勝手に古茶樹を「発見」し、「命名」している。人間と自然との関係や、茶文化の将来について、いろいろと考えさせられた。シンポジウムの後、一泊二日の予定で右の邦威茶樹王を見学に行くことになっていたのであるが、われわれ二人は、景遇でのご馳走に当たつたらしく少々体調を崩し、思茅の病院で検査を受けねばならなくなった。しかし、毎日アルコールによる体内消毒を怠らない谷さん・渡辺さんは何事もなく、口惜しがるわれわれ二人を残し、黄・何両先生と共に出発した。その旅のことは、別に報告される筈である。

このあと一行四人は杭州へ赴き、茶葉博物館での第四回西湖茶会を、王家揚氏（中国国際茶文化研究会会長）の案内で見学し、竜井茶の栽培・製造の現場も見学した。谷さん・渡辺さんはここより帰国したが、われわれ兩名は更に、董淑鐸先生（湖州陸羽茶文化研究会会長）の案内で湖州に陸羽の故地を訪ね、南京に赴いて中国茶文化資料研究の第一人者、朱自振先生と会談した。それらについては、紙幅の都合で割愛する。

現在、各流儀で家元講習会ともいふべき形式の教授が広くおこなわれているが、この種の講習会の祖型は裏千家の夏期講習会にあるのではないかと思われる。

明治四十一年の文部省令改正によつて茶儀科を置く高等女学校が次第にふえていったといわれる。このような女子教育の変化をふまえ、裏千家では明治四十四年七月号の『今日庵月報』に出した講習会公告において、その主旨を「女学校茶儀科教員並二将来回教員タラント欲スルモノヲ為終了後二女学校茶儀科教員資格證明書ヲ付与致」としている。

次に、裏千家講習会の推移を『今日庵月報』と『茶道月報』（大正十一年六月改題）によつて一覽表とした（事頁参照）。尚、本稿の目的は初期の様子をみることにあるので、資料の整理は講習会初見の明治四十四年より昭和十年までにとどめている。

雑誌記事からは明治四十四年の講習会が初見であるが、同年『今日庵月報』九月号の目次に「八月一日此日ヨリ毎日講習会始ル」とある。ただしその内容は記されていない。

## 裏千家夏期講習会について

大坪宗富

明治四十五年の講習会は記事がないので明治天皇崩御の為、中止であったかと思われる。大正元年を第一回夏期講習会とする記事が、大正四年九月号に記載されていることからみて、回数の数え方には異説もあつたようである。

講習期間は大正十三年迄は一ヶ月間実施され、それを三期にわけてカリキュラムが組まれていた。大正五年は真精院（玄々斎の室。一八五〇〜一九一六）逝去のため特に短縮された。大正十四年からの日数変更については、短く緊張した方が結果に於いて得るところが多い」ということになされ、昭和二年からは十五日間が標準となった。

受講者ならびに男女別については終了者記念写真から推定したもので正確は期しがたない。かなり早くから女性中心で、大正二・四・六年は男性数が比較的多い。課目については、割稽古、小習十六ヶ条、四力伝、茶箱、立札、茶事、七事式、行台子、真台子等がなされ、終了日には宗匠自ら試験を実施した。

（投稿）

# 夏期講習会一覽表 (明治44年~昭和10年)

回	開会式	開催期間	日数	受講者数 (終了退席者数)	男女	課目	備考
	明治 44.8.1	8.1~8.30		8			明治44年7月25日発行11号に募集広告がある 明治44年9月号目次に「此日より毎日講習始 ル」とある
1	大正 1.8.1	8.1~8.30	30	9	0 9		写真だけがあるが記事は何も記されていない
2	2.	8.1~8.29	29	18(18)	8 10	七事式 茶事(昼) 瓢亭にて朝茶事	円能斎自作歌詠の茶杓があらわれる
3	3.8.1	8.1~8.31	31	15	3 12	七事式 瓢亭にて親睦茶事	8月5日玄々斎若宗匠と講習生全員が茶会に 出席/8月18日帰る人もいる
4	4.8.1	8.1~8.30	30	25	7 18	一人一日三回点前するよ うに記される 灰の稽古	講習期間を1~3期と分けている/宗匠の訓 示に「慢は損を受け謙は益を受し」とある
5	5.8.1	8.1~8.22	22	19		四ヶ所に糸を掛け、小習 の稽古 灰型の稽古	8月11日真精院遠逝/8月22日講習会終る/ 終了式は9月1日
6	6.8.1	8.1~8.17	17	14	7 7	正午茶事	
7	7.8.5	8.1~8.30	30	13(13)	1 12	正午茶事 七事式 逆勝 手 真台子引き渡の茶事	円能斎の箱書付茶碗、茶杓が終了者に授与さ れる
8	大正8年は紙価、印刷費の暴騰により頁数を減じたため夏期講習会の記事がない						
9	9.8.9	8.1~8.30	30	13	5 8	一期小習以下 三期茶通 以上 三期七事式 真の 稽古	宗匠染筆の記念品授与
10	10.8.8	8.1~8.30	30	13	3 10	割稽古 小習 茶箱	10日前後から申込数がふえてくるがこの講 習会は多人数は好まずと記されている
11	11.8.5	8.1~8.30	30	32			32名は受講途中の人数と思われる
12	12.8.8	8.1~8.30	30	13			開会式後、円能斎の炭点前、手造烏台の茶碗 で濃茶なされる
13	13.8.5	8.5~8.31	27	14	2 12	小習 唐物以上 正午茶 事 行台子 真台子	8月5日夏期講習会開会式の挨拶5時間後、円 能斎逝去
14	14.7.20	7.20~8.5	15	13	0 13		淡々斎による初炭、濃茶点前がなされる
	15.7.20	7.20~8.10	21	13			写真だけがあるが記事は何も記されていない
15	昭和 2.7.20	7.20~8.5	15			唐物以上真台子迄 茶事 七事式	募集の案内だけで記事は何も記されていない
16	3.9.1	9.1~9.15	15	15	3 12	小習 行台子引渡し茶事	家元増築中の為、この年に限り9月1日始ま るとある
17	4.8.7	8.17~8.31	15	25	3 22	小習 茶箱 行台子 真台子 朝茶事 正午茶事 七事式	桂離宮、大宮御所を拝観している
18	5.8.17	8.17~8.31	15	25	5 20		桂離宮、修学院離宮を拝観している
19	6.8.17	8.17~8.31	15	25	6 19	割稽古 逆勝手 小習 四カ伝 中置 行台子 七事式	桂離宮、大宮御所を拝観/冬期講習の希望が ある
20	7.7.16	7.16~7.30	15	34	6 28	小習から行台子 茶事 七事式 茶箱 立札	名席見学/送別茶会を催す
21	8.8.16	8.16~8.30	14	36	2 34	小習 七事式 四カ伝 正午茶事 行台子 立札 真台子 講演4回	閉会式後、懇親会、送別茶会がある
22	9.8.6	8.16~8.30	14	36	5 31		送別の茶会がある/閉会式後懇親会/閉会式 の記事だけある
23	10.8.16	8.16~8.30	14	35	4 31	運び平点前 小習 七事式 本書院莊 四カ伝 茶通箱 立札 行台子 真台子 茶事	宗匠肉筆花押入り帛紗がくぼられる/聚光 院、高桐院、真珠庵を拝観/送別茶会、懇親 会がある

## 平成七年度総会報告

### 《議事》

平成七年度の総会が五月二十一日(日)、新緑の宇治市生涯学習センターで行なわれた。これまで、総会・大会を同日に開催してきたが、今回はじめて分離し、総会を宇治市で行なうことになった。あいにくの雨模様にもかかわらず、百名弱の参加者を得て、午前十一時過ぎに開催。

谷端昭夫理事の司会によって始められ、まず中村昌生会長の挨拶。続いて議長の出任に移り、若原英式氏を議長に、倉澤洋副会長を副議長に選出して議事に入った。

議事は熊倉功夫理事から平成六年度の事業報告が行われ、予定通り各種の事業が終了した旨の報告がなされた。続いて赤沼多佳理事より平成六年度の決算報告が行われ、決算については伊藤郁太郎監事より適正である旨の監査報告が行われた。

次に平成七年度の事業案、予算案が熊倉、赤沼理事より提案され、いずれも満場一致で了承された。今年度は二月に研究会を東京六本木の国際文化会館で行うなど、新たな行事

が計画されている。

本年三月末で任期が満了した役員については、谷見理事から茶の湯文化学会は現在、基礎固めの時期である事から、もう一期続けていただいたら如何ですか、との提案があり、異議なく了承された。

最後に、林屋晴三副会長より、午後には茶の湯文化学会はじめての見学会も予定されており、各施設で有意義な時間を過ごしていただきたい旨の挨拶があり、総会は滞りなく終了した。

### 《見学会》

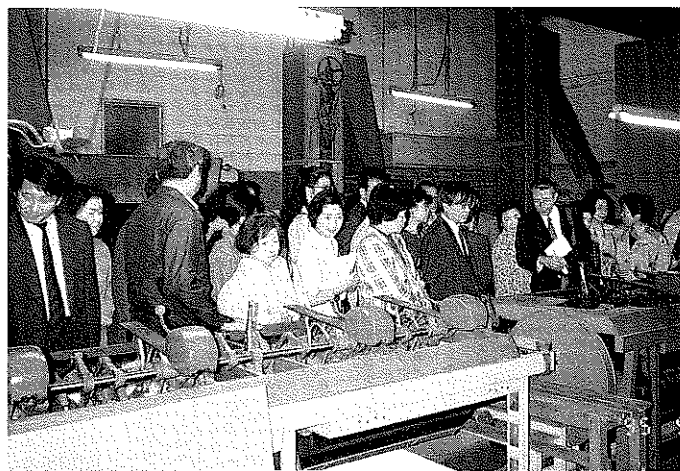
昼食をはさんで見学会。ちょうど茶摘みの時期にあたることや、平等院が世界文化遺産に指定された事などを勘案し宇治での見学会が行われる事になった。

見学会は上林記念館、宇治市営茶室「対鳳庵」、朝日焼窯元、林屋茶園、万福寺の五ヶ所で、事前配布の案内資料を持つての見学。

上林記念館では江戸時代以来の製茶の歴史を、宇治市営茶室「対鳳庵」は名前こそ以前と変わらないが、面目を一新した茶室での呈茶、朝日焼窯元(朝日焼窯芸資料館)では寛文元年の創業以来の伽藍とそこで培われた文

化を、さらに林屋茶園では、製茶の工程を丁寧な解説をいただきながら見学する事ができた。

午前中の雨も小降りとなり、時によって晴れ間も見え出す天候で、茶どころ宇治の雰囲気を満喫することができた。ご無理をお願いしたにも関わらず、快く見学をお引き受けくださいました。関係各位に心よりお礼申し上げます。



見学会の一角 (林屋茶園にて)

## 理事会報告

平成七年度第一回理事会が、五月八日京都市女性センターウイングスにおいて十八名の理事の出席のもとに行われ、左記の議題を審議した。

- 一、平成六年度事業報告
- 二、平成六年度決算報告
- 三、平成七年度事業計画
- 四、平成七年度予算案
- 五、平成七、八年度役員

### 会費納入の依頼と震災で被害を受けられ方の猶予について

平成六年度および七年度の会費をまだ納入されていない方は、至急郵便振替にてお振込みくださいますようお願い申し上げます。  
なおこの度の阪神大震災で被害を受けられた方につきましては、会費納入を猶予致しますので、該当される方は事務局までお申し出ください。

## 研究会予告

第三回研究会を左記のとおり開催しますので、ふるってご参加ください。

日時 平成七年七月三十日(日)

午後一時半～四時半

場所 京大 会館(会報第二号に地図)

発表 煎茶に於ける「清風」について

小川流煎茶家元

小川 後楽氏

洛陶会東山大茶会について

大手前女子大学専任講師

岡 佳子氏

京都国際建築技術専門学校教授

矢ヶ崎善太郎氏

(会員は参加費無料、非会員は五百円)

## 発表者の募集

大会・研究会における発表者を募集いたします。大会は一題につき報告二十分、質疑応答十分、研究会は同六十分、三十分程度です。発表を希望される方がありましたら、事務局までご連絡ください。応募される方は八百字程度の梗概と研究会・大会応募の別を明記して、事務局へ提出してください。

## 事務局報告

◆総会当日はあいにくの雨模様で天候となったにもかかわらず多くの方に参加していただき、ほっと胸をなでおろしています。

当学会では初めての見学会も同時に行いましたが、不慣れなためか一部不都合があり、参加者にご迷惑をおかけいたしましたことをお詫び申し上げます。

◆七月の研究会には発表枠を越えて申し込みがわり、うれしい悲鳴をあげています。次回の研究会や大会への切り替えをお願いした方も出ましたが、ひるまずに応募していただきますようお願いしています。

◆今年度大会は十一月十二日、京都にて、また第四回研究会は二月十七日、東京にて開催の予定です。

◆今号も投稿原稿があり八頁だてとなりました。大坪氏はずっと早くに寄稿していただいておりますが、今になってしまったことをお詫びします。

応募原稿が多数あれば、これまでの六頁だてから、八頁だてを原則として紙面を確保しますので、どしどしご応募ください。